

# 二つのNHKラジオ日本放送

一、日本通訊「東亜同文書院」これはNHK、ラジオ日本一九八三年九月十八日の中国語放送（中国文と日本文）である。「週友」52号（一九八四年四月）に掲載されたものを、滬友会加来揚子郎事務局長の了承を得て、ここに転載した。記して感謝する。編集の都合上、放送内容以外は割愛させていただいた。

## 〔中国語放送〕

日本廣播電台現在播送日本通訊

一九三二年九月十八号、發生了九一八事變、日本軍接二連三地占領了瀋陽、長春等中国東北的主要城市。

第二年的二月二十八号深夜、在上海發生了日中兩國軍隊的衝突事件。

當時、大約有五十名日本學生、担任了建築防禦工事、和替当了日本軍審訊俘虜的便衣隊做翻譯的工作。

他們就是上海徐家匯虹橋東亜同文書院的學生。

現在、在東京担任高而夫球場經營公司顧問的志波正男也曾是這些學生裡面的一個人。

## 〔日本語放送〕

ラジオ日本只今より東京便りを放送いたします。

一九三一年九月十八日、滿洲事變が起こり、日本軍は瀋陽（奉天）・長春（新京）など滿洲の主要都市をつぎつぎと占領しました。

翌年一月二八日深夜、上海で日中兩國軍隊の衝突事件が起きました。當時、約五〇名の日本人學生が防禦工事の構築と日本軍が捕虜にした便衣隊を取調べる通訳の任務に当たりました。

彼等こそ、上海徐家匯虹橋路の東亜同文書院の學生でした。現在、東京でゴルフ場を經營する会社の顧問をしている志波正男も、かつてこの學生仲間の一人でした。

(志波談話)

一位同文書院の畢業生、特意從日本人居留地虹口來到我們學校、勸導我們說「戰鬪開始了、在中國的日本人都受着苦、你們學生們也絕不能袖手旁觀。」

學校當局、從以前起就有決定、說「絕不能讓學生做這樣的事。」

但是事關緊急、我們不顧這些決定到海軍大隊總部所在的本人居俱樂部去了。

我們在那裡一直工作到第二天晚上、夜裡也睡不着覺、因為睡覺的時候便衣隊不住地往屋子裡打槍。

東亞同文書院是一九〇一年五月、一個叫作東亞同文會的日本民間團體在上海南郊桂墅里創建的。

從日本各地選拔的初中畢業生來到上海、進這個學校裡學習、也就是說、在上海而且是在租界外面出現了一所日本人經營日本人學習的學校。

甲午中日戰爭結束後的第三年、在東京由當時的貴族院議長近衛篤磨為會長成立了東亞同文會。

這是為支援鴉片戰爭以來受西歐列強侵略之苦而即將崩潰的中國、提倡日中西國要一起來保衛亞洲安全的所謂大亞洲主義者們集合起來組成的一個民間組織。

當時、這種大亞洲主義成了日本的一大思潮。

這出於一種外交上的觀點、也就是說、西歐列強及俄國的對華侵略、對日本來說、也是一種外部壓力、但是可以說、出於道德主義觀點的成分、更強一些。

(志波談話)

「ある同文書院の卒業生が、わざわざ日本人居留地の虹口から我々の学校に来て『戦闘が始まった。中国に居る日本人は苦しんでいる。君たち学生も手を拱いて傍観しているわけにはいかんぞ』と勧告した。学校当局は以前から『学生には絶体にそのようなことをさせられない』と方針を決めていました。」

しかし、事は急迫していたので、我々はこれ等の決定に従わず海軍大隊本部があった本人居俱樂部に行きました。我々はそこで、ずっと翌日の夜まで働き、夜も眠れなかった。というのは、眠る頃になると便衣隊がひっきりなしに建物めがけて撃って来たからです。」

東亞同文書院是一九〇一年五月、東亞同文會という日本の民間團體が上海の南郊桂墅里に創設したものです。日本各地から選拔された中学校卒業生が上海に来て、この学校で学びました。上海のしかも租界の外に日本人が経営し、日本人が学ぶ学校が出来たわけです。

日清戦争終了後三年目、当時の貴族院議長近衛篤磨が会長となって東京に東亞同文會を設立しました。

これは阿片戦争以来、西歐列強の侵略を受けて苦しみ、まさに崩壊しようとしている中国を支援して、日中西国一致してアジアの安全を守ろうという、いわゆる大アジア主義者が集まって結成した一つの民間組織でした。

当時、この大アジア主義は日本的一大思潮となっていました。これは外交上の観点からであって、即ち西歐列強及びロシアの対華侵略は日本にとっても外部圧力でありました。し

即、人們認為中國人同是亞洲人、而且兩千年來日本人一直受着中國文化的恩惠、我們應該阻止白種人侵略中國。

東亞同文書院作為實踐東亞同文會的這種思想的場所、由根津一勤奮努力在上海設立的。

根津一也得到了清朝兩江總督劉坤一的積極支持。

這樣誕生的東亞同文書院、本來應該成為日中友好、日中合作的光輝舞台。

但是、這一時代、同時也是中國經歷着動蕩的歷史的時期。

東亞同文書院成立三年以後、一九〇四年爆發了日俄戰爭、日本獲得了向朝鮮半島、中國東北進攻的立腳點。

一九一一年發生了辛亥革命、第二年清朝滅亡、中華民國成立、接着下一年也就是一九一三年爆發第二次革命、戰火燒到了上海桂墅里的東亞同文書院。

東京車站前面的大樓裡有一個中國餐館、叫作山水樓。

山水樓的會長宮田武義今年九十一歲、從一九一二年起他曾在東亞同文書院學習過三年。

（宮田談話）

第二次革命的時候、革命軍從江南機器局方面攻打上海、我們學校就在離江南機器局大約走十分鐘的地方。

革命軍先在通往杭州的鐵路上停了一會兒、就向學校這方面進攻和袁世凱的軍隊作戰、在這場戰鬥中我們學校就被燒毀了。

かし、道德主義的な考え方が更に強かったと言えます。それは中國人が同じアジア人であり、しかも二千年來、日本人はずっと中國文化の恩恵を受けて來たので、当然白色人種の中國侵略を阻止しなければならないということです。

東亞同文書院は、東亞同文會のこのような思想を實踐する場所として、根津一が懸命に努力して上海に設立したものです。根津一はまた清朝の兩江總督劉坤一の積極的支持も得ました。

こうして生まれた東亞同文書院は、当然、日中友好、日中合作の輝かしい舞台となる筈でした。しかし、この時代は、また中國が動亂の最中に在った時期でもありました。東亞同文書院が出来て三年後の一九〇四年、日露戦争が勃発、日本は朝鮮半島及び中國東北への進攻の立腳點を獲得しました。一九一一年辛亥革命が起きて、翌年清朝は亡び、中華民國が成立、続いて翌年即ち一九一三年に第二次革命が勃発して戦火は上海桂墅里的東亞同文書院を焼いてしまいました。

東京駅前前のビルの中に、山水樓という中国料理店があります。山水樓の會長宮田武義は、今年九十一歳で一九一二年から東亞同文書院で三年間学びました。

（宮田談話）

「第二次革命の頃、革命軍は江南機器局方面から上海を攻撃しました。我々の学校は江南機器局から歩いて約十分の所にあったのです。」

革命軍は杭州へ通じている鐵道上で、しばらく停止して学校の方面を攻撃、袁世凱の軍隊と戦闘し、この戦場となって我々の学校は焼かれてしまいました。」

在這以後中國國內，由軍閥割拠進到國民黨統一中國，以後又由像五四運動那樣的反日反封建主義運動，中國共產黨的興起而導致國共的內戰，形勢一直動蕩不定。

在這漩渦之中，東亞同文書院的建築物曾經兩次遭到戰火焚燒，校址曾經遷移過六次。

但是在此之間，從日本去入學的学生每年都從無斷絕地來到上海。

而且自一九〇七年以來，每年學生們在校的最後一年裡要舉行長達幾個月到的中國各地去的長途旅行。

這種旅行也從未間斷。當然，東亞同文書院不可能會與動蕩的中國社會完全遊離的。

一九二一年七月中國共產黨在上海成立，共產主義思想也浸透到同文書院的学生中間。

戰前作為朝日新聞特派員，曾經到中國各地去工作過的藏居良造在談到當時的情況時說。

（藏居談話）

當時有一位叫王學文的中共的大人物來到了學校的宿舍裡，而且正大光明地出來進去。

他使同文書院的一些学生加入了中國共產黨，這種事情在日本是很難想像的。

正因為在上海才可以這樣。我們也讀了很多在日本禁止出售的共產黨的書。

中國共產黨真地在中國各地展開鬭爭，當然我們很感興趣，有的学生真当了黨員。

一九三七年發生了七七事變，日本和中國進入了全面戰爭狀態。到了這個時候，東亞同文書院的建學精神與現實之間的差

その後、中國の國內は軍閥の割拠を経て、國民黨が中國を統一しましたが、さらに、五四運動のような反日反封建主義運動を経て、中國共產黨の興起は國共内戦を引き起こし、ずっと不安定な動乱の状態が続きました。この渦の中で東亞同文書院の建物は二度も戦火で焼かれ、学校の所在は六回移転しました。しかし、この間も日本から来て入學する学生は毎年絶えることなく上海にやって来ました。

しかも一九〇七年以来、毎年学生たちは在學最終の年に数ヵ月にわたる中國各地への長い旅行をしました。この旅行は間断なく実施されました。当然のことながら東亞同文書院は動乱の中國から完全に遊離することはできませんでした。

一九二一年七月、中國共產黨が上海に成立して、共產主義思想も同文書院の学生の間に浸透して来ました。戦前、朝日新聞の特派員として、中國各地で仕事をした藏居良造は、當時の様子を語る時、このように話しました。

（藏居談話）

「當時、王學文という中共の大物がいて、学校の寮にやって来ました。しかも堂々と出入りしていたのです。彼は同文書院の一部の学生を中國共產黨に加入させました。このようなことは日本では想像もつかぬことでした。これは上海でこそ出来たことで、我々も日本で発売禁止されている共產黨の本をたくさん読みました。中國共產黨は、現に中國各地で鬭爭を展開しており、当然我々は大いに関心を持ち、学生の中にはすすんで黨員になった者もいました。」

一九三七年支那事變が起こり、日本と中國は全面戦争の狀態に突入しました。この時に及んで、東亞同文書院の建學精

距、已經完全不能消除了。

也就是說，以反對列強侵略保衛中國為目的而創立的同文書院，現在不得不目睹日本對中國的侵略，不少的学生為這一矛盾而苦惱。

現在住在沖繩的作家大城立裕也是其中之一。他在一九四三年入學，在還是學生的時候，日華戰爭結束了。

（大城談話）

一九四四年四月，當時日本軍訂了一項非常難以實行的計劃，想從中國的農村購買軍用米。

當時，中國通貨膨脹很嚴重，公定兌換率是一比五・五，但是實際兌換率是一比一萬，可是日本軍却要以公定兌換率購買。

在執行這項蠻橫的購米計劃時，我們被派去作翻譯。

即使是學生也要穿軍裝，帶槍和子彈，全副武裝。

中國的農民當然不想亮，而且即使想亮，也沒有，因為他們只剩下自己吃的那麼一點兒。

因此他們就說，「沒有」「沒有」。於是我們就抄家一直抄到住房裡，如果拒絕抄，我們就用槍逼迫。

我們學生們非常難受，我們想自己並不是為做這樣的事到上海同文書院來學習中文的。

我們嘗受到了一個非常非常大的矛盾。

位於愛知縣豊橋市的愛知大學，這是以因日本戰敗而停辦的

神と現実との間のギャップをなくすことは、もはや到底出来なくなっていました。即ち、列強の侵略に反対して中国を守ることを目的として創立した同文書院は、今や、日本の中国侵略をはっきり見つめざるを得なくなり、多くの学生はこの矛盾に悩みました。

現在沖繩に住んでいる作家大城立裕もその一人でした。彼は一九四三年に入學して、まだ学生の時に日中戦争が終わりました。

（大城談話）

「一九四四年四月、當時の日本軍は非常に実行困難な計画を立てて中国の農村から軍用米を購入しようとしていました。當時中国はインフレが非常にひどくて、公定兌換率は一対五・五でしたが、実際の兌換率は一対一万でした。しかし日本軍は公定兌換率で購入しようとしていました。このような理不尽な購米計画の時に、我々は派遣され通訳をやらされました。学生であっても軍服を着せられ、小銃と弾丸を持ち完全武装でした。中国の農民は当然売りたいがありません。たとえ売りたいしても無いのです。彼等は自分たちが食べるほんの少量を残しているだけです。それで、彼等は『有りません』『有りません』と言うだけです。そこで我々は家探しをし、だんだん住家の搜索にかかります。もし拒絶したら、我々は小銃で脅かして強行しました。我々は大変辛く、我々はまさかこんなことをするために、上海の同文書院に来て、中国語を勉強したのではないと考えました。我々は、いつも、とてつもなく大きな矛盾をいやと言うほど味わわれました。」

愛知縣豊橋市に在る愛知大學は、即ち、日本戰敗によつて

東亜同文書院最後一任院長本間喜一が中心、一九四七年開設の学校。

戦敗時留在同文書院の学生中、有三百人左右転到了這所新設の大学裡来。

愛知大学裡跟中国有関の学科特别多、並且編輯出版的中日大辞典等、跟中国的關係到底是非常深的。

愛知大学法経学部の池上貞一教授是一九四〇年進東亜同文書院の、自愛知大学建校以来就在這裡工作。

#### (池上談話)

一九四七年一月開始上課、我也教過中文、本来、在同文書院任教的很多老師預定要来的。

但是到了三月份、幾個美国軍人来到校長室裡說、「不許再採用同文書院的老師。」

當時、七七事變以後從同文書院畢業的畢業生都不准担任教師、後來美軍又把同文書院的教授中、担任院長、和系主任等重要職位的人当作驅逐的對象。

現在這個大學裡与同文書院有些關係的人、包括我在內只有三個人、減了很多。

據說、美軍好像把東亜同文書院看成是日本在中国設置的培養特務的学校、在愛知大学創校的時候認為這是特務学校復活而施加了压力。

東亜同文書院、從一九〇一年創立到一九四五年停辦為止、一共送出了五千人以上的畢業生。

畢業生們、自戰前起就廣泛地活躍在政治、經濟、外交、報道、教育等各個領域中、特別是、在戰後的日中關係方面、同

廢校となった東亜同文書院の最後の院長だった本間喜一が中心となって、一九四七年に開設した学校です。敗戦の時、同文書院に居た学生の中、三百人前後が、この新設の大学に転入して来ました。愛知大学には中国に關した学科が特に多く、それに中日大辞典を編輯出版するなど、中国との關係は、とても深いのです。

愛知大学法経学部の池上貞一教授是一九四〇年東亜同文書院に入学した方で、愛知大学開校以来、ここに勤めています。

#### (池上談話)

「一九四七年一月、授業を始め、私も中国語を教えました。元来、同文書院で教職にあった多数の先生が来る予定でした。しかし、三月になって数人のアメリカ軍人が学長室に来て『同文書院の先生をこれ以上採用してはならぬ』と言いました。」

當時、支那事變以後の同文書院の卒業生は、すべて教師になることを許されず、後になってアメリカ軍は、また同文書院の教授の中で、院長、学科主任等の重要な職にあった者を追放の對象としました。この大学で、同文書院と少しでも關係の有る者は、私を含めて、わずか三人で大変減ってしまいました。アメリカ軍は東亜同文書院を日本が中国に設けたスパイ養成の学校と見なしたらしく、愛知大学が創設された時、スパイ学校が復活したと思って压力をかけたのだそうです。」

東亜同文書院は一九〇一年の創立から一九四五年の廢校まで、全部で五千人以上の卒業生を送り出しました。卒業生は戦前から、政治、經濟、外交、報道、教育等広範な領域で活躍しました。特に戦後の日中關係方面で、同文書院の卒業

文書院の畢業生所起的作用是不小的。

日本の報道機關第一次派遣駐北京記者的時候、大部分記者是同文書院の畢業生。

日本の商行在北京開設辦事處的時候、也是如此。

但是戰後到現在已經過了三十八年、東亜同文書院の畢業生們逐漸退出了第一線。

東亜同文書院の同窓會滬友會、現在的會長是原每日新聞社社長田中香苗。田中香苗是在一九二五年入學的。

#### (田中談話)

現在學校已經沒有了、畢業生每年都有人死去。

但是熱愛中國的心情、想做和中國有關工作的心情、以及要盡全力幹到最後的那種干劲兒、却仍然沒有消滅。

現在的日中關係可以說對經濟方面太突出、應該改變一下、使日本能夠在文化方面也做一些工作。

正如同文書院創立者根津一和荒尾精所想的一樣。我們做這樣的工是大有可能的。

只是同窓會的人們已經老了。今後同窓會逐漸要消失、我現在當的、就是快要消失的同窓會的會長。

為阻止列強侵略中國而創立的東亜同文書院、隨着日本對華侵略的不斷進展、理想與現實之間的差距越來越大。

戰後、畢業生們又在各個方面做出了很大貢獻。

在動蕩的中國現代史的漩渦中、留下了各種足跡的東亜同文

生が果たした役割は、かなり大きなものがあります。日本の報道機關が、最初に北京駐在の記者を派遣した時、大部分の記者は同文書院の卒業生でした。日本の商社が北京に事務所を開設した時も同様でした。しかし、戦後から今日まで、すでに三十八年経ち東亜同文書院の卒業生はつぎつぎ第一線を退きました。

東亜同文書院の同窓會である滬友會の會長は、元毎日新聞社社長田中香苗です。田中香苗は一九二五年書院に入學しました。

#### (田中談話)

「現在學校はなくなつてしまいました。卒業生は毎年死んで行きます。しかし、中國を熱愛する氣持、中國と關係のある仕事をしたという氣持、そして全力をつくして最後までやり遂げたいという心意氣は、決して今でも失つていません。現在の日中關係は經濟方面に突出しすぎていると言えます。これを改め、日本が文化方面でも何らかの務めが出来るようにすべきです。

まさに、同文書院の創立者、根津一と荒尾精の考えと同じです。我々がこのような仕事をすることは充分出来ます。

いせん、同窓會の人たちは、もう老齡となつてしまいました。これからの同窓會はしだいに消滅しようとしています。私は現在、間もなく消滅する同窓會の會長です。」

列強の中國侵略を阻止しようとして、創立した東亜同文書院は、日本が對華侵略をつぎつぎと進展するにつれて、理想と現實との間のギャップは、ますます大きくなりました。

戰後、卒業生はいろいろな方面で大變貢獻しました。動亂

書院、在日中關係史上究竟具有什麼樣的意義呢？  
研究十五年戰爭時期日中關係的靜岡大学教授黒羽清隆、這樣說。

（黒羽談話）

東亜同文書院基本上來說，是要反對西歐列強，白種人的力量的壓迫，守衛亞洲，在某一方面來說相當健全的。

只是在此我們要注意一點，就是本來所謂大亞洲主義的思想，作為思想本身來說並沒有具備嚴密的理論構成。

比方說，自己國家的利益與整個亞洲的利益針鋒相對的時候，應該怎樣辦。這一點就是極其曖昧的。

特別是在九一八侵略東北以後，這種思想被迫起了與其本來所持的理想格格不入的作用。

可以說，這些曖昧之點就是造成這種情況的重大原因。

日本通訊，播送完了。謝謝各位聽衆，再見。

這裡是日本廣播電台 NHK。

のさなかにあった中国現代史の渦の中に、いろいろと足跡を残した東亜同文書院は、日中關係史上に、結局どのような意義を持っていたのでしょうか。

十五年戰爭中の日中關係を研究している靜岡大学教授黒羽清隆は、このように語っています。

（黒羽談話）

「東亜同文書院は基本的には西歐列強、白色人種の力の壓迫に反対して、アジアを守ろうとする、ある一面から言えば、かなり健全なものでした。ただここで、我々が注意しなければいけないことは、即ちいわゆる大アジア主義の思想で、思想そのものが嚴密な理論づけがなされていませんでした。

たとえば、自分の國家の國家利益とアジア全体の利益が、真つ向うから相反した場合どうすべきか、この点がその曖昧の最たるものです。特に、九一八滿洲侵略以後、この思想は本來持っていた理想と全然相容れない齟齬をさせられました。これら曖昧な点が、このような事態を作り出した重大な原因と言えるでしょう。」

東京便り、放送を終わります、皆様有難うございました。  
さようなら。こちらラジオジャパン・NHKです。



二、「踏上中国大地的日本大学生們」これはNHK、ラジオ日本一九九五年八月十九日の中国語放送（中国文と日本文）である。文字起しは愛知大学に在学中の中国人留学生孟文奮さんが行なった。日本文中の日記は、東亜同文書院中国調査旅行記録第二巻「中国を歩く」藤田佳久編著大明堂より引用したものである。なお、この文の掲載はNHK国際部の了承を得た。記して感謝する。

### 〔中国語放送〕

這裡有一本兒旧日記，時間是一九二三年，舞台是中国。日記出自于親眼目睹了万里長城雄姿的日本学生們的筆下。

### （日記）

「六月二二日 晴。今天按計畫要去天津。但来到支那北部，不去長城豈不遺憾。在這種想法的驅使下，我們坐上了八点半的列車，前往八達嶺。在青龍橋站下車後，又乘座毛驢車，約二十分鐘後來到了八達嶺，即万里長城。

目睹支那人祖先修築的這座宏偉的建築，使我浮想連翩，遙思成吉思汗時代。然而再看今日民國，不禁使人想「國破山河在」這句古詩來。

宏偉的長城曲折連綿，蜿蜒起伏，氣勢磅礴，一派千年不變的雄姿似乎在講述着中華民族歷經的盛衰与蒼桑。」

這篇日記是東亜同文書院的四年級学生写的。

東亜同文書院是設在上海的一所日本人的高等教育機構。從創建到日本戰敗，一直持續了四十年。該校的方針是要了解中国，并深入中国。在這個思想的指導下，學生們写畢業論文要到中国各地做調查，學生們把它称之为「一大旅行」。

### 〔日本語放送〕

ここに一冊の古い日記があります。時は一九二三年、舞台は中国、万里の長城を目の前にした日本人学生の筆になるものです。

「六月二十一日 晴。予定は本日天津に行くことになっていましたが、北支那を旅行して万里の長城を見ずに帰るとは如何にも残念と言うので、今八時半の北車で八達嶺に向う。青竜橋駅に下車して、驢馬で約二十分で八達嶺即ち長城に達す。昔時の支那民族の偉大なる工事の跡を見てジンギスカンの昔を懐い、而して今日の民國を思えば、転た国破山河在と賦った古人の言を思はざるを得ない。嶺から嶺、谷から谷へと延々として続き雲から出て雲に入る長蛇の如きこの長城は、幾多中華の盛衰を物語るかの如くに昔ながらの姿を守っている。」

この日記の筆者は東亜同文書院の四年生です。東亜同文書院、それは第二次大戦前、日本が戦争に敗れるまでの四十年余り、上海に設けられた日本人の高等教育機関のことです。中国の中で中国を知る、そのような教育を受けた書院生たちは卒業論文の調査をするため中国各地を見て歩きました。

剛才介紹的那篇日記，就是學生們在這個大旅行中寫下的。和畢業論文一起，這些日記要交給老師。

聽衆朋友們，下面就為您播送夏季專題節目「踏上中國大地的日本大學生們」。

讓我們翻開這本舊日記，看一看東亜同文書院的学生們在大旅行中的所見所聞，所思所想。需要事先交代的一点是日記當中，雖然有些措詞從今天的觀點來看有欠妥之處，但是我們還是尽可能遵照原文加以介紹。

上海，這座城市自十九世紀中期就成了歐美列強入侵中國的樞紐。起步較晚的日本也把此地做為向中國擴張的一個樞紐，與歐美列強爭奪利益。在這種形式下，為了培養和中國開展經貿往來的人才，日本人在上海設立了一所日清貿易研究所，而這個研究所就是一九〇一年成立的東亜同文書院的前身。

同文書院三十六屆學生村岡正三畢業于一九四〇年，他這樣說道：

#### （村岡談話）

「回首已經逝去的自己的八十年，我認為同文書院創始者們的理想中最基本的一点就是日本人与中国人和睦相处，携手為亞洲和家鄉的繁榮做出貢獻。如我本身也是一貫堅持這樣做的。」

同文書院開設的課程有法律，政治，經濟，還有中國政治和中國地理，中國的時事問題以及中文。

書院生たちはそれを大旅行とよびました。いま紹介した日記は大旅行の道中に書かれ、卒業論文とともに提出された書院生の日記なのです。

ラジオ日本、夏の特別番組「中国の大地をふんだ日本人学生たち」、東亜同文書院の学生達が大旅行において、何を見て、何を考えたのかを放送いたします。この時間は書き残された日記をひもとき、彼らの足蹟をたどってみたいと思います。なお、日記の表現には今から見ると不適切な箇所がありますが、原文をできるだけ、そのまま使うこととさせていただきます。

上海、この地は十九世紀の半ばから、イギリスやフランスなど欧米列強の中国への侵出拠点となってきました。後発国の日本も、上海を拠点の一つとして侵出し、欧米列強と利害がからみ合うようになります。そのような中、中国との経済関係をなう人材育成が必要だと考えた日本人によって、日清貿易研究所が上海に設立され、それを引き継ぐかたちで、一九〇一年、東亜同文書院が誕生しました。

同文書院の三十六期生、一九四〇年に卒業した村岡正三さんは次のように言っています。

#### （村岡談話）

「自分の八十年間をふりかえってみると、書院の大本は、日本人と中国人が仲良くして、アジアと郷土の発展を図るのが創立者たちの理想であり、また私もそれを貫いたと思っています。」

同文書院では、法律、政治、経済に加え、中国の政治や地理、時事問題、中国語などが教えられました。また、上海で

另外、在上海の這座學校里體驗的生活本身也是真正了解中國的一個途徑。畢業論文的体裁涉及中國各地的地理、經濟文化和教育等各個領域。

學生們深入各地，做細緻入微的調查。為完成畢業論文進行的大旅行可以說是為期四年的學校生活的大總結。

一九三三年該校的四名學生組成一組，從上海經由南京北上到了漢口，然後去洛陽、內蒙古、北京和青島等各地，做了一次大旅行。下面就介紹他們寫的日記。

#### (日記)

「大正十二年五月三十一日，星期四 陰。下午爆竹聲震耳欲聾，在同學們「萬歲」的一片歡呼聲中，我們四個英俊少年乘坐的汽車徐徐開出校門，奔馳在兩旁栽滿楊槐的柏油馬路上。我的緊々の綁腿，反戴着的鋼盔更增添了旅行的氣氛。我思緒万千，白天想像那一望無際的四川與內蒙的畛野；

晚上又想像遙遠的支那北方的景象，睡夢中幾次被廣東的砲聲驚醒。

現像向往以久的支那內地大旅行就要拉開序幕了。」

大旅行每年都在五、六月起程，是為期三個月的一次漫長的旅行。由於氣候嚴峻，水土不服，旅行並不輕鬆。

下面的這篇日記，描寫了學生們在華北黃土高原旅遊時的情況。

の書院生活そのものが、生きた中國を知る體驗でした。卒業論文で取り上げるテーマは中國各地の地理、經濟、文化、教育など、あらゆる分野に涉っており、現地を自分で回って、きめこまやかな調査を行ないました。卒業論文のための大旅行は、いわば書院生活の総仕上げでした。

一九三三年、四人の書院グループは、上海から南京を経由して漢口を北上し、洛陽、內蒙古、北京、青島を通る大旅行へ出発しました。

彼らの日記です。

「大正十二年五月三十一日 木曜日 曇。午後三時、爆竹の音響勇ましく、熱誠こもる學友萬歲聲裏に、紅顏青雲の四士を乗せた自動車は徐々に校門を出て、アカシアの翠色滴るアスファルト街を渦るか妙に走る。きちんとしめた巻脚絆、阿弥陀に冠った「ヘルメット」は如何にも旅気分にあざわしい。前途に万里の想いは交々脳裏に浮べり。

覚めては空想を遙か四川蒙古の畛野に馳せ、寝ては遠く北支、広東の砲聲に心を驚かせし事幾々たび。久しく憧憬的たりし支那內地大旅行は、今こそ愈々その幕を切り落されたり。」

大旅行は毎年五月か六月に出発し、凡そ三ヶ月をかける大がかりなものでした。氣候的にも厳しく、なれない風土のため、旅行は決して楽なものではなかったようです。

華北の黃土高原地帯をいく書院生の姿が日記に描かれております。

(日記)

「六月十三日。終於越過了函谷関、十点左右路過黃河岸辺、由于是車道、路比較平坦。

大家都默不做聲、不久便進入了沙路、走在前面的人每走一步、脚跟就揚起一片沙土、風像死去了一樣。只見溫度計上指着華氏一百四十度、額頭像火烤一樣的熱。

不知什麼時候、眼睛潮濕了。水壺裡空々如也、嘴裡滿是沙土、頭暈目眩、路無一人。我們急着趕路、這種鬼地方再呆二十分鐘就得命赴黃泉、呼吸變得困難了。

K君有點兒跟不上、我的腦海裡突然浮現出父親的形象、接着是母親、哥哥和姐妹的面容。風時而吹來、遠處有人在走動、我們終於來到大字堂喫了一碗面。……」

一九二二年、清朝垮台、成立了中華民國、內戰却依然在持續。同文書院的学生們走出上海、看到了中国的大千世界、也目睹了軍閥混戰的局面。

一九二五年來廣州旅行的一個學生這樣寫道：

(日記)

「六月九日 晴。船停了、船員告訴我們前方在打仗、船開不過去。廣東的政府軍在同雲南、廣西的部隊激烈交戰、而要去沙面又非得過這條河不可、真倒霉。碰巧過來一條舢板、我們便跳上去打算突破前方的陣線。

但戰火非但不息、反而愈加猛烈、槍砲上接連不斷、趟若走在街上、彈頭就會擦肩而過、偶而閃現在十字路口的人影是警

「六月十三日 愈々函谷関に入る。十時頃から黄河の岸を通る。自動車路だから割りに平いらだ。皆黙って行く。やがて又砂道に入る。前を歩いて行く奴の脚から藁々と砂が上る。風は死んでいる。寒暖計は一四〇度、額は焼かれる様だった。いつの間にか涙が滲じむ。水筒の水はなくなる。口の中は砂だらけ、眼はグラグラする。

人つ子一人通らぬ。私達は急いだ。もう二十分もこんな道を行くなら、自分達は死んで終わらなければならぬ。呼吸が詰まってくる。そしてKが一人遅れ勝ちだ。フツと父の顔が見える。母の顔が、兄の顔が、そして姉の顔も見える……。時々風が吹いて来る。遠方の方で人が動く。大字堂に着いて麵を啜る。」

清朝を倒して中華民國が成立したのは一九二二年、しかし、その後も中国は内戦が続きます。各地に割拠する軍事政権は軍閥と呼ばれていました。上海を出て、はじめて中国のさまざまな姿を見た書院生たちは、軍閥の戦乱うち続く中国の姿を目のあたりにしました。

一九二五年、廣州に來た書院生の日記です。

「六月九日 晴天。船は止っている。船員は戦争のため行けないのだと言う。廣東政府軍と、雲南—廣西軍とが相對して猛烈に射撃をなし合っていて、沙面にはどうしても此河を遡らねば行けないようだ。困った事になったものだ。折よくやって來た舢板に乗込んで愈々戦線突破だ。戦は尚、たけなわである。銃声又砲声は愈々勢を増して段々と響く。支那街

衛的士兵。

忽然M君飛也似的跑了過來，火速告急地說，「有個同學被雲南軍隊逮捕了。」

原來事件是這樣的。K君想用照相機拍攝雲南部隊的營地，被附近的一個士兵發現，士兵用槍瞄准了他的胸口，他們懷疑K君是軍事密探，把他逮捕了。

我們立刻與領事館連系，并托請前來商量的領事館警察署長去談判。過了一會兒，K君才無事獲免。當晚到了下榻的旅館，大家還在談這天發生的事兒。這件事說明，戰爭年代言行稍有不慎，就有可能引起嫌疑，弄不好還有可能被槍斃。」

這篇日記記述了同文書院的学生險些被当成密探。一八九四年，甲午戰爭以後，日本向中国实行軍事擴張。

在中國人眼裡，在中國各地到处做調查的同文書院的那些學生們，便也成了同樣的擴張者。

同文書院的学生們渴望友好，但事與願違，中國人投向他們的是冰冷的目光。日本通過日俄戰爭和第一次世界大戰不斷地擴大了在中国的權益。這種動向引起了中国的反感。收復被奪權益的斗争襲卷了全中国。

下面是同文書院的学生在一九二三年写的日記。

# (日記)

「六月九日 晴。上午七点乘火車去鄆城，十点半通過駐馬店，聽說這一带排日運動很激烈，果然列車剛進站，就見四五百人

に出づれば、彈丸は頭上を掠めてヒュット飛ぶ。稀に見る路上の辻に閃らめく人影は、警備に当る兵隊の影であった。M君が果然此の雲南軍に捕れたの飛報をもたらし、驅込んで来る。事情は写真撮りのK君が戦線地帯にある雲南軍の本営をカメラに収めんとしたのが原因で、為にK君は附近にいた雑兵等のために銃口を差し向けられ、軍事探偵の嫌疑で捕縛せられたと言うのである。「ソレ」と計りの急を領事館に報ずる。折よく駆付けてくれた領事館警察署長に交渉を委ね、漸くにしてK君は無事で許されて帰った。

宿に入つては暫くはK君の写真事件の話に花が咲く。如何に軍事探偵の疑いが深かつたかを知る事が出来る。戦中ではありグツグツしていたら或は銃殺ものだったろう。」

この日記の中に、書院生たちが軍事探偵の疑いをかけられていた記述がでています。一八九四年の日清戦争以降、日本は中国への軍事的侵入を深めていきます。中国の各地に姿を現す調査を行なっている書院生は、中国の人たちから見れば、侵入してくる日本そのものと映つたのかもしれない。理想とはうらはらに、中国の冷い視線を書院生たちは甘受しなければならませんでした。

さて、日本は日露戦争と第一次世界大戦を通じて、中国での權益を拡大していきました。このような動きに対し、中国では日本に対する反感が高まり、日本に奪われた權益を回収しようとする動きが全土に湧きおこります。

一九二三年の書院生の日記です。

「六月九日 晴。午前七時半発の汽車で鄆城に向う。十時半駐馬店をすぐ。この地は排日風潮の猛烈なる所ときいていた

的遊行隊伍浩浩蕩蕩地走進軍站裡。他們手持旗幟，上面写着「抵制日貨，收回旅順、大連，勿忘國恥」等的標語口號。如果我們在這裡下車，說不定會身遭惡運呢。過了一會兒，火車便又出發了。」

(日記)

「七月十二日。五點二十分抵達鄭州。

我們我投宿的旅館，大金台沒有空房間，迎賓樓，泰安站，金台，也都說沒有空房，我心想准是在搞排日運動，這麼一想走在街上也覺得過往的行人似乎都在怒目而視得看着自己。

高集棧說有空房子，我們總算鬆了口氣，可忽然有人對夥計耳語了幾句，夥計便馬上過來又對我們說，剛才說的空房已經有人住下了。

我們明白又是在排日，心裡頓覺淒楚。我們知道什麼呢，什麼也不知道啊，為什麼要受這份兒氣呢，越想越覺得窩火。

對於這個大旅行，當時的中國政府認定是日本為了侵略，才組織同文書院的学生們到各地調查的，因此有時也下達過指示，不允許各地行政機關對学生采取保護措施。

一九三一年的滿洲事變，第二年的上海事變，三七年的盧溝橋事變和次年第二次的上海事變，加之日本用武力不斷擴張，使得同文書院也無法抗拒這個潮流了。

一九四四年畢業的四〇屆學生賀來揚子郎說，透過當時的院長大內暢三使他看到了同文書院的姿態……

が案の通り猛烈なものがあつた。ちやうど汽車が駅につくや否や、四、五百名よりなる排日示威運動の大遊行(デモ)団が、各自手に手に抵制日貨(日本商品ボイコット)、回收旅大(旅順・大連を取り戻せ)、勿忘國恥(國辱を忘れるな)等の文字を大書した旗をかざしながら駅内を練り歩くのであつた。私共はもしここに下車でもしたらひどい目にあつたかも知れない。汽車はまもなく発車した。」

「七月十二日。五時二十分に鄭州に着く。大金台に行くと、『房子都沒有(部屋はない)』と言う。迎賓樓、ない、泰安棧、沒有(ない)、金台、沒有(ない)、何処に行つても皆沒有(ない)』という。なんだか排日らしいと思うと、街を行く奴等が吾々を睨んで行く様に見える。高集棧は『有』と言う。しめたと思つてホット安心する。変な奴が来て夥計(ボーイ)に耳打ちする。これは皆塞がつているんだからと夥計(ボーイ)が断りに来る。

排日だ!! 何糞と思うが妙に悲しくなる。己達が何を知る、己達がなんで苦しめられるのだ。……そう思うと口惜しくなつてきた。」

大旅行について、當時の中國政府は、日本は侵略のために書院生を組織して、中国各地で調査を行なわせているとして、彼らに對する保護の禁止などを各地の行政機關に通達したこともありました。

一九三一年の滿洲事變、翌年の上海事變、三十七年の盧溝橋事變、さらにその翌年の第二次上海事變と、日本が軍勢力を使つてますます深く中国に入つていくようになると、同文書院も、その流れには逆らえませんでした。

（賀来談話）

「第二次上海事変爆發時、上辺命令三四届学生去当随軍翻譯。

大内院長起初是表示反对的、但是最終還是同意了、因為在前一次的事變中、日僑要求我們幫助、院長說「家長們把他們的兒女托付給我、萬一出了一點事情怎麼好交代」

因此沒有同意、結果遭到日僑的強烈遣責。那個時代、誰敢和軍隊作對、實在是沒辦法。我們当中有幾個情願為國家當間諜呢？」

一九二九年畢業的二五届学生安澤隆雄介紹了同學們左右為難的形象、他說：

（安澤談話）

「那個時候、哪有精力考慮什麼理想。中國在堅決抗日、日本則為了保護日僑不斷地向右翼發展、那不是侵略是什麼呢？」

兩國的情況我們都看在眼里、心裡覺得不是滋味兒啊、既使有、也都是迫不得已被人利用。那個年頭是敢怒不敢言啊。因為一旦憲兵知道了、就會被扣上賣國賊的帽子、遭到鎮壓。」

同文書院的学生們渴望日中和睦相處、而現實中的兩國關係却在向相反的方向發展。

我們回過頭來、再看一遍一九二五年的一篇日記、它描写了

四十期生の賀来揚子郎さん。一九四四年卒業、東亜同文書院の姿勢を、當時の大内暢三院長の中に見出していました。

（賀来談話）

「第二次上海事變の際、三十四期生が通訳従軍を命ぜられたとき、大内院長は最初は反対したのです。というのは、上海事變の際、居留民から手伝えと言ってきたのを、大内院長は、「あずかった大事な子弟だから」と出さなかった。それで、居留民から非難をうけたことがあったためです。軍に逆らってはつぶされる時代だったので止むを得なかった。我々の間で「國のスパイをやろう」などと考えていたものは、ごく僅かだった。まずいと思う。止むを得ず利用されたというのが現実だと思います。」

二十五期生の安澤隆雄さんは一九二九年卒業、書院生の板ばさみになった立場を、こうふりかえります。

（安澤談話）

「當時、理想像を描くひまはなかった。日本はぐんぐん侵略的におしていきこうとするし、中國は徹底抗戦を行ない、排日、排日であった。日本は兵隊を送って居留民の警備だとして、ますます軍事的におしていく。確かに侵略でしたよ。その状況を苦が苦がしく見ていた。心の奥には批判的であつても、口には出せなかった。憲兵政治で、もしも非国民だとして、しつ引かれて売国奴だと断圧されるのだから、口には出せない。」

中國人と日本人とが仲良くする、これが書院生たちの理想でした。しかし、實際の中國と日本との關係は、彼らの理想と離れていくようです。

發生在雲南山路上的一場小々の風波，同文書院的Y君把扛行李的挑夫說的「涼快」，錯聽成了「兩塊」，日記這樣寫道：

(日記)

「六月二十九日，晴。Y君今天的經驗教訓應該引以為借，挑夫說：「涼快，涼快」。Y君聽見了生氣地問道：「什麼兩塊，不是說好了一塊二包下的嗎？」。挑夫還在說：「涼快極了」。Y君又反問「怎麼兩塊七了？」。還邊罵邊打，過了一會兒，才知道是自己聽錯而誤會了，便買了一個什麼東西送給挑夫以示道歉，双方和好如初了。

我覺得不能把這件事僅僅看作一個笑話，一笑了之，因為就連懂得一點支那語的人都是如此，那麼日本人平時為什麼容易被人誤解也就可想而知了。」

這場小小的風波告訴我們，不要以為懂點兒中文就能跟中國人搞好關係了。寫這篇日記的學生似乎也認識到了這一點。

同文書院有不少學生就是由此而投身于中國的共產主義運動，堅決反對日本的做法的。

ふたたび振りかえって、一九二五年の日記、雲南省の山道での風景です。道中荷物のかつき屋と会話をかわしています。ところがここで、小さな事件がおこりました。かつき屋が「涼しい(リヤンクワイ)」といったのを、書院生のY君には、かつき料を「二ドル(リヤンクワイ)だ」と言ったように聞こえました。実はこの二つの中国語、イントネーションが違っただけで、発音はどちらも「リヤンクワイ」で同じなのです。

「六月二十九日 晴。今日特筆大書すべきは会計Yの失敗談だ。

挑夫、木陰で水を飲みながら頭を叩いて、「リヤンクワイリヤンクワイ涼快涼快(すずしい)」、Y「リヤンクワイ兩塊(二ドル)?」、一塊二(一ドル二十セント)で雇ったではないかと怒鳴る。挑夫「リヤンクワイチー涼快極(とてもすずしい)」。Y「リヤンクワイチー兩塊七? (二ドル七十セント?)」。

馬鹿野郎とYは挑夫をなぐりつける。後でその意味が分つて、挑夫に何か買ってやって仲直りしたのだ。然しそれは単なる笑話として看過すべき問題ではない。シナ語を多少知っていてもこの始末だ。日本人が支那人に誤解を受ける点もこの辺にあるのではなからうか。」

中国語を少し知っているからといって、中国の人間とうまくやっていけることにはならない。この書院生は中国を知っていると思いきや、自分でいた自分たちの落とし穴に気づいたかのようです。

こうした点に気づいた書院生たちの中には、中国で巻き起



こる共產主義運動に身を投じ、徹底的に日本のやりかたに反対する人たちも多くなりました。

一九四五年、日本敗于中国、中国軍隊也開進了上海接管了同文書院。

戦后、以帰国的同文書院の教師們為中心、在名古屋附近創建了愛知大学。當時從同文書院帶回日本的一些圖書、學生們的調查報告和一部分日記還都保存在這裡。

愛知大学在研究中国和漢語教學方面做出了獨特貢獻。愛知大学教授藤田佳久着眼与沈睡在這裡的這些資料、正在对此做系統的整理。

他在想同文書院的這些旅行調查曾被用于侵略中国、那麼在对這一事實充分進行反省的基礎上、是不是也可以讓它為今后的日中学術交流發揮一些作用呢。

#### （藤田談話）

「在戦后研究中国的日本学者当中、有不少人認為在中国設立日本学校本身就是錯誤的、說他們充当了殖民統治的炮灰、很少有人知道同文書院的成果。

但是我認為囊括了整個中国在二十世紀前半期的這種資料、除了同文書院的旅行報告之外也沒有別的了。就資料的時間跨度長達半個世紀這一點來說也是堪称世界之最了。我相信這些旅行調查記錄对了解现在的中国也是有用的。」

一九四五年、日本は中国に敗戦、上海にも中国の軍隊がやってきて、同文書院は接収されました。戦後、日本に帰ってきた東亜同文書院の教員たちが中心になり、名古屋の近くに愛知大学を設立しました。ここには日本に持ち帰えることのできた同文書院の蔵書や、書院生の調査報告と日記の一部が保管されています。

愛知大学は、中国事情の研究や中国語教育で、独自の成果をあげております。愛知大学教授、藤田佳久さんは、この大学に眠る東亜同文書院の記録に着目、系統的な整理作業を手がけています。かつては日本の中国侵略に使われたともいわれた書院生たちの調査旅行の記録、そう評価された事実もふまえながら、学術的に、今後の日中関係に役立てられないかと、藤田さんは考えます。

#### （藤田談話）

「とりわけ戦後の中国研究をする人たちには、中国にあった日本の学校といったこと自体が、そもそもおかしいのではないかと、植民地の先兵ではないかという意識があり、東亜同文書院の成果はほとんど知られていない。しかし、中国全土を網羅するものは、二十世紀前半の中国に関しては、この調査旅行以外ないだろうと思います。しかも半世紀以上かく成果が蓄積されたという点では、世界最大級のスケールといえるでしょう。調査旅行は現在の中国を知るうえでも、きつと役に立つと思うのです。」

東亜同文書院在三十五年の歲月裡共組織過六百六十條路線の大旅行。通過這樣的旅行調査、學生們親身體驗到了中國幅員の遼闊、也目睹了人們的生活。他們的理想在現實面前雖然破滅了、但他們由此開始考慮自己應該怎樣做人和生活。

戰后同文書院為日本造就了一批之人材、他們不忘對過去反省、活躍在各個領域。他們之中有商務人員、有教師、有新聞工作者、也有作家。同文書院學校封閉已經有五十年了、但畢業生們在繼續為日本和中國牽線搭橋。

夏季專題節目「踏上中國大地的日本大學生們」就播送到這裡。今天介紹了東亜同文書院的學生們所寫的旅行日記。

這次節目是由中山岳、金田佳郎和伊藤美佳子為您播放的。謝々各位收聽。

日本廣播電台 NHK。

三十五年間で六百六十コースにわたって行なわれた大旅行、この調査旅行を通じて書院生たちは、そこに中国の広さと人々の生活ぶりを直かに見ることになりました。彼らの描いた理想は現実の前について、自分がどのように生きていけばいいのかを考えさせられることになりました。

それでも同文書院は多くの人材を戦後日本に輩出しました。過去の反省をふまえ、それぞれが各分野で活躍することとなりました。ビジネスマンとして、教員として、ジャーナリストとして、作家として、東亜同文書院が幕を閉じて五十年、卒業生たちは日本と中国との橋渡しにかかわり続けているのです。

ラジオ日本、夏の特別番組、この時間は、「中国の大地を踏んだ日本人学生たち」と題し、東亜同文書院の学生の大旅行日記から、お届けいたしました。

こちらはラジオ日本。NHKの国際放送です。  
東京からお送りしています。